
小野屋騒動顛末記

石田梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小野屋騒動顛末記

【Nコード】

N4873K

【作者名】

石田梅

【あらすじ】

大店である小野屋には二枚の看板がある。

一つは小町娘と評判の、一人娘のお滝。

もう一つは色男と名高い若い手代、弥一。

問題どころか良いことだらけ、と思われている二人だったが、お滝は自分の守役でもある弥一に対し、長年続くやっかいな悩みをもっていた。

コメディ風の時代恋愛もの、気軽にどうぞ。

第一話

からりと晴れた日よりはなんとはなしに心をつきうきさせる。お天道様に誘われる者は多いようで、通りは人であふれかえっていた。中でも表通りに面した小野屋は、今日も女の客を中心に華やかにぎわっているはずだ。

部屋つぶしの三男坊だった先代が思いつきのように始めた小物売りが、まさか本家を上回る盛況ぶりをみせるとは誰が考えただろうか。

きつと本人は、最初からそのつもりだったのだろう。

老いた今でも青年のように笑う祖父を見て、お滝は確信していた。そして、かつては唯一の下男、今は使用人の筆頭として祖父のかたわらで微笑む弥助だけが、祖父の目論見を理解していたことも。

とにもかくにも、今の自分がいるのは紛れもなく二人のおかげなわけだ。お滝はちよいと扇のようなまつげを伏せて、金糸の細かな刺繍がほどこされた自分の着物の袖を見た。隣を歩くお千佳も、同じことを思っただけらしい。

「きれいなエ。さすが小野屋さんだわ」

「ありがとう。でも、少しばかり……いえ、かなり派手じゃないかしら」

何かの稽古の帰り道なのか、若い娘が並んで歩く姿は目にも華やかだ。しかもそれが評判の小町娘ときたら、いやでも視線が集まってしまう。

「いいじゃない、とっても似合うんだから。いいなア、お滝ちゃん」

華やかな着物を簡単に作れてしまう小野屋の娘でうらやましい。着物に負けないお滝自身の美しさがうらやましい。そういう意味でお滝をうらやましがる者は多いが、同じく大店の娘であるお千佳がそう言う理由は他にある。

「お滝ちゃん、今日もお店を見て行つていい？」

「ええ、いいけど。でも、向こうの辰田屋さんに新しい荷が届いたばかりだつて……」

「もう、お滝ちゃんのいじわる」

頬を染めてむくれる姿は愛らしく、下心があつて自分と並んで歩いていることもつい許してしまう。

「はいはい、冗談よ。いるかはわからないけどね」

「いいのよ、それでも」

お千佳は途端ににつこりと笑い、さらに頬を赤くした。

小野屋が近づくにつれ、お千佳はあからさまに落ち着きをなくした。意味もなく髪を触ったり、着物のすそを整えたりしている。

「そんなに緊張しなくてもいいでしょう」

「だつて……」

藍染に白抜きの小野屋の屋号が見えてくると、店の前で掃き掃除をしていた青年もこちらに気づいたようだった。遠めからでも背の高いすらりとした体つきであるのがわかる。

途端、お千佳はお滝の裾をぎゅっと握る。

「お嬢さん、お帰りなさいまし」

青年はすつと頭を下げると、切れ長の目を優しく細め、形の良い唇の端をきゅつと持ち上げた。普段は石のように固い表情をしているが、そのときばかりは鶴の子のように優しく甘い。それだけで、通りすがりの女たちは顔を赤くしてため息をつく。

「お千佳さんもしよなの。新しい櫛でもない？」

「はい、どうぞこちらへ」

弥一はのれんをすつとめくり、自然なしぐさで二人を迎え入れた。ダメ押しのようにニコツと微笑むことも忘れない。そのために、お滝はのぼせあがったお千佳を後ろから支えなくてはならなかった。いつか、あの笑顔を自分だけに向けて欲しいとお千佳は言った。自分だけに向けられる笑顔。

お滝はすつと頭をよぎつた弥一の顔に背筋を震わせた。アレを見たら、お千佳はいたいと思うのだろうか。

第一話（後書き）

全六話予定です。

早め続きを投稿していくので、ぜひお付き合いください。

感想などいただけたらとてもうれしいです。

よろしくお願いします！

第二話

お千佳を送り出したあと自分の部屋に戻ったお滝は、ようやくほつと息をついた。本当はさりげなく離れて弥一と二人にしてあげようかと思ったのだが、思いのほかお千佳の力が強く、握られた袖を離すことができなかったのだ。

「今日のお琴のお稽古はどうでした」

「うん。まあまあ」

「お嬢さんのまあまあなら、人並み以上に優秀なことでしょう」

お世辞とは思えない、心底そう思っている、という弥一の言葉の調子にお滝は苦笑した。

「それより、お千佳ちゃんがああのお嬢気に入ってくれてよかったね」

「ええ。お嬢さんのお友達ですから、気合いを入れましたよ」

につこりと『笑う』弥一に、お滝は苦笑の色を強くした。

今や小野屋の名物手代となっている弥一は、祖父・清吉に仕えた弥助の孫だ。弥助は清吉が嫁を迎えてしばらくしてから所帯をもったが、子ができるのは弥助のほうが早かった。清吉にとって弥助が兄やであつたように、彼らの息子たちも使用人の枠組みを超えたつきあいをしていた。そのため当然のように引き合わされた弥一とお滝。まだ若い二人だが、かたや評判の小町娘、かたや働き者の色男、と看板が二枚たつたようなもので、小野屋の人々はこの組み合わせを諸手を挙げて大歓迎している。

しかし、お滝だけは弥一のどうしようもない欠点を知っており、それは長年お滝を悩ませてきたのだった。

お滝は弥一と顔を合わせるたびに、初めて会ったときのことを思い出す。

五つ年上の兄やと出会いは、お滝が三つのときの初春だった。あ

いにくの曇り空で、冬の寒さが舞い戻ってきたような日より。二コ二コ顔の祖父を見ても、なぜかお滝の胸騒ぎは治まらなかった。今思うと、それは子ども特有の鋭い勘働きだったのではないか。幼いお滝は火鉢のそばで祖父にくっついて震えていた。

いつも通り、静かに「旦那様」と呼びかけた弥助の影が障子に写った。その後ろにもう一つ小さな影がついている。

音もなく部屋に滑り込んできた二人は、並んで膝を正して座った。弥助の隣にるのが、自分より少しばかり上の少年であることはすぐわかった。だが顔はしつかと伏せていてわからない。

「お嬢様、今日からお側に仕えさせていただきます、せがれの弥一でございます」

祖父に背中を押され、お滝は兄やとなる人物をおずおずと覗き込んだ。それに合わせるように、少年・弥一が顔をあげる。

「あ……」

思わず声をあげてしまった。予想もしないものが目の前にあったからである。

本当はすっとしていであろう鼻筋は、まるで悪臭に耐えかねているように曲げられていた。細められた目の間からもしわが走って、眉間とつながっている。唇はひきつり、誰かが両端を無理に引っ張っているようだった。少年の顔は、地獄の鬼よりすさまじかった。

恐ろしいことでもあったのか、不吉なことでもあったのか。おろおろするお滝をよそに、弥一は澄んだ声であいさつをした。

「弥一と申します。よろしく願います、お嬢様」

しわが一段と深くなっているというのに、行儀よく頭を下げる弥一を見て、お滝はようやく気づいた。

世の中には、笑顔が凶相となる人がいるということに――。

これが精一杯の笑顔なのか、とお滝は最初弥一に同情したものだ。これでは誰に笑顔を向けても怖がられてしまうだろう、と。だがそれはお滝の取り越し苦労だった。というのは、なぜか店に

出た弥一の笑顔は完璧といってもいいほど美しいものだったからだ。整いすぎた顔立ちは冷ややかに目に映るものだが、弥一はそれに適度な温度を与える術を心得ているようだった。幼い子とはしゃがんで視線を合わせ、年寄りには手を貸してやり、女には軽く微笑んでみせる。その上如才ない働きぶりで、男衆からも嫉妬されることなく、小野屋になくってはならない存在となっている。お滝の心配事はまったく逆だ。その笑顔を自分だけに向けて欲しくて、弥一のたもとは恋文がたまり、人だかりは日に日に増えていくのだった。そうして、反対にお滝の悩みは増えていく。

第二話（後書き）

二話目です。どうぞ、最後までおつきあいください。
感想などいただけたらとても嬉しいです。
よろしく願います。

第三話

初秋のような穏やかな笑顔は、弥一の代名詞ともいえる。それだというのに、弥一の笑顔はお滝の前だけでは鬼も泣き出す凶相へと変貌した。特に二人きりになったときはひどい。もう、見ている者を威圧しているとは思えないのだ。お滝はつい目をそらしてしまう。

しかし、弥一の守役ぶりは、爺ばかりの清吉が大満足するものだった。いつでもお滝を最優先し、手間暇を惜しまず、精一杯尽くしてくれている。それなのにあのまがましい顔、いったいどういう訳なのか。もしや、日ごろの姿は奉公人として我慢に我慢を重ねた成果であり、実は大層自分のことが嫌いなのではないのか。それが二人きりのときはあふれ出るように表に出てきてしまうのではないか。そう思ってお滝は提案してみたことがある。

「ねえ、弥一」

「はい、お嬢さん」

深々と刻まれた笑いしわから顔を背けながら、お滝は言う。

「あの……無理しなくてもいいのよ」

「何がでしょう」

「私のお守なんて、面倒でしょう。やりたいことはたくさんあるだろうし」

遠まわしな兄や役免除の言葉だった。

頭の回転の速い弥一は、すぐさま顔色を変えた。しわを全部ひっこめて、元々の整った顔立ちに戻る。そうすると、弥一から冷え冷えとした空気が流れてくるようだった。

「お嬢さん、おれがお側にいては迷惑でしょうか」

「え、いや、その……そんなことはないの」

迷惑というか、ただ怖いのだけれど。そんなことが言えるはずが

ない。ましてや、真剣なまなざしで真正面から向かってくる人間に
対して、非情になれるお滝ではなかった。

「ただ、弥助みたく働きたいんじゃないかと思って」

なんとか答えると、弥一はあつという間に、不吉な笑いしわを復活させた。冷気はひっこんだが、今度は妙に生温く落ち着かない気持ちになる。

「ありがとうございます。でも、おれはこうしてお嬢さんのお側に
いるのがいいんです。親父たちも同じようにして奉公を積んだんで
すから。お優しい心遣い、本当にありがとうございます」

深く深く頭を下げた後、弥一はそれまで以上にお滝一筋に尽くし
てくる。その態度に嘘はない。

問題は、笑顔だけ。いい加減慣れてもよさそうなものだが、どう
いうわけか一向になれることができないでいる。

「お嬢さん、お茶をお持ちしました」

「ありがとうございます、弥一」

弥助と同じ、耳に障らない静かな声とともに、弥一は部屋へ入っ
た。手にはお茶とお菓子が入っているだろう包みがのったお盆。

「今日のおやつは、ちよつと変わっているんですよ」

お千佳と別れたのはほんの少し前。ならば、と砂一粒ほどの期待
を持って、弥一を見る。が、そこにはやはり、慣れることのできな
い不吉な深いしわがあった。これで声と態度がとことん優しくな
ったら、親に泣きついてでも弥一を守役にしなかつただろう。

「どうぞ、開けてみてください」

弥一は両の手に納まる小さな包みをお滝に差し出した。包みには
木戸屋、と聞き慣れない店の名が書かれている。

「どこがどう変わっているの？」

「見ていただければ……」

ニコニコ、と形容するには障りがある弥一の眼差したが、真心と
深い理解の目を以て対峙することを覚えたお滝は、弥一が自分の反

応に期待をしていることを感じ取った。

どれどれ、と好奇心をのぞかせたお滝は、ゆっくりと包みを開く。
「わア、かわいい！」

中には、小さな饅頭が五つも入っていた。親指と人差し指で輪を作ったほどの大きさである。

「こんなの、初めて見た」

「お客さんから聞いたんです。新しくお菓子屋さんできた、と。そこで一番人気がそれなんです」

お嬢さんが喜ぶと思って、とは弥一は言わない。弥一はお滝のためになることしかない、と心に決めているのだから、そう思っているのは当然のことなのだ。恩着せがましく言うほうがおかしい。

お滝は弥一の心がすっかりわかっていたから、お礼のかわりに饅頭を賞賛する。

「食べるのがもったいないわ……でも食べちゃう。あんこが甘すぎなくて、とつてもおいしい。あ、こっちは中が違う。白あんだ。こっちは栗が入ってる！」

咲き誇る花もかすむほどの、本当の美しい笑顔を前に、弥一のしわは一層深くなる。その姿は、悪鬼の親玉と囚われたお姫様にしか見えない。

「また、買ってきますね」

お願いね、と言いなから、お滝はまんじゅうに手をのばす。

多分、このほのぼのとした、かつちよつとした恐れに伴う関係はずっと続いていくのだろう。お千佳には悪いが、いくら乙女たちから想いを寄せられようが、弥一はまだまだ若い奉公人でしかなく、所帯を持つのもまだまだ先だ。何より弥一自信がお滝の守役を続けることを望んでいる。

だから、このままずっと。

お滝はまったく気づいていなかった。

自分だけに向けられている笑顔に恐怖はあるものの、けして嫌悪感を持つていないことに。

弥一ができずとも、家つきの自分はとくに所帯をもつことができるということに。

第四話

縁談話がもちあがつたという。

お滝は、それを祖父の清吉から知らされた。

「縁談……？」

「ああ。もうそんな年なんだね」

美しく成長した孫娘の姿を見ながら、しみじみと清吉は言う。

「お前と同じ年の、お千佳さんがねえ」

縁談が来たのはお滝ではなく、お千佳のほうだった。二人は十五の娘盛ではあるし、家付きの一人娘だ。お滝はもちろん、お千佳もなかなかかわいらしい容貌であるから、こういった話がくるのも当然であつた。

それでも、弥助が運んできたお茶を一口飲むと、お滝はお千佳の弥一への思いを考えた。

「お滝や、お前はまだ先でいいね？ ゆっくり慎重に相手を選ぶのがいいよ」

結局清吉が言いたいのはそういうことらしい。商売のことに關しては迷いのない采配をふるえるが、かわいい孫娘のことに關してはどうも違うらしい。

そんな祖父の心孫知らず、お滝は祖父への返事もおさなりに、お千佳の話を聞きたがつた。

「どなたと？」

「紙問屋さんの二男坊だそうだ」

「そうですか……」

お滝の顔に陰りがはしつたのを見て、そばにひかえていた弥助が付け加えた。

「真面目ないい方だそうですよ」

穏やかな笑顔は弥一ととてもよく似ているが、やはり年月を重ね

た深みがある。

いい人が相手だ、ということに少し安心したが、お滝の胸の内のもやは晴れなかった。

遠くから弥一の後ろ姿を見ただけで、頬を染めて体を固くするお千佳。弥一に熱をあげる女は多いが、お千佳の思いは格別に深いような気がしてならなかった。そのお千佳が。

「失礼します」

廊下から弥一の声がした。

「お嬢さんにお客様です」

まっすぐな瞳は強気な態度とはうらはらに、どこかおびえた色をうつしていた。

お滝の部屋に通されたお千佳は、すぐに話をきりだした。

「お願い、弥一さんと二人で話をさせて」

とっておきの振袖にかんざしをまとったお千佳は、いつにもましてかわいらしい。その袖をきつくつかんで震えている拳はお千佳の覚悟の証だろう。

「お千佳ちゃん……」

「わかってる！」

お千佳はぎゅっと唇をかんだあと、続けた。

「わかってるの。今回の縁談話がなくなっても、うちは近いうち、誰か婿養子をもらう。それは絶対に……弥一さんじゃない」

わかつてはいるが、どうしても思い切りがつけられない。

だから。

「私の気持ちだけでも、伝えたいの」

お滝はじっとお千佳を見つめた。

「うん。わかった」

はっと顔をあげたお千佳に、お滝はゆっくりとほほ笑んだ。

「これから弥一を呼んでくる。ここにいて」

お千佳の目がふつと揺らぐ。

「あ……ありがとう。ありがとう」

目から涙をこぼすお千佳を見ないようにして、お滝は部屋をでた。人を好きになるというのは、こういうことなのか。お滝はぼんやりと考える。

自分は何かと美しいとほめられる。だが、それは『好き』だというわけではない。

こんなにまで誰かを慕い、慕われることは不思議なことだ。

一緒にいたい。話をしたい。笑顔を自分だけにむけてほしい。わかるような、わからないような。その想いが叶えられないものならば、深ければ深いほど辛くなる。そんな気持ちをお滝はもったことがない。

もしあんな想いを持ったら、自分はどうなってしまうのだろうか。

あんな想いをぶつけられたら自分は。弥一は。

まだ昼間の稼ぎ時、店先から聞こえる喧騒が遠くに聞こえた。

足が重い。

「どうしました、お嬢さん」

「弥一」

足先を見つめていた視線を上げると、落ち着かない面持ちで歩いてくる弥一の姿があった。

「お人払いを、とのことなので控えていましたが、お茶もお持ちしないのでは、と思ひまして。……顔色が優れないようですが」

「弥一」

「お嬢さん？」

お盆を持ったまま首をかしげる弥一はいつも通りだ。いつも通りすぎて、今まで何も感じていなかった。

弥一は私のそばにいる。話をする。笑顔を向けてくれている。

それは、私にとってどんな意味があるのだろうか。

「具合が悪いんですか、頭ですか、お腹ですか」

お滝は自分の考えにふけり、あわて始めた弥一をなだめることもできない。弥一はさらにあわてる。

「お嬢さん？　しつかりしてください、お嬢さん！？」

「あ」

肩をゆさぶられ、ようやく目を覚ましたお滝は間近に迫った弥一の顔に気付いた。

「あ、ああ、びっくりした。弥一はずいぶん整った顔よね」

珍しく笑顔ではない弥一の顔は、目鼻口があるべき場所にあるべき形で見事におさまっている。

思わず言うまでもないことを口走ったお滝だが、次の瞬間ぎよつと目をむいた。

弥一の顔が一瞬で真っ赤に染まったのだ。

「いいいきなり、な、何をおっしゃるんですか」

「え。本当のことだけど」

「う、お、お、おじょうさんっ」

お滝を案ずる憂いを帯びた表情から一転、しわが顔の中心に集まり、見ほれて熱が出るどころか恐怖で凍りつく「いつも通り」の弥一の顔が現れた。

「あ、もどった」

いつも通りだ、とお滝がつぶやいたとき、後ろから「ぎゃっ」と悲鳴があがる。

びっくりして振り返ると、そこにはお千佳が立っていた。なかなか戻ってこないお滝にじれて、部屋から出てきてしまったのだろう。しかし、今のお千佳には先ほどみえた覚悟の炎はすっかり消え失せていた。

「お、お、お滝ちゃん……」

「お千佳ちゃん、ごめんなさい、今すぐ席をはずすから」

お滝の言葉など聞こえていないように、お千佳は青ざめひきつった口元から声をしぼりだした。

「だ。誰なの……その人」

第四話（後書き）

残すところ、あと二話です。

どうぞ、最後までおつきあいください。

感想などいただけたら嬉しいです！

よろしくお願いします。

第五話

「お嬢さん」

「どうしたの」

「いえ、あの」

弥一はしかめ面をつくり、下を向いてしまう。いつにない幼い姿だ。

まさかの結末を迎えたお千佳の恋騒動は、かわった人間それぞれに傷を残していった。

夕暮れに染まるお滝の部屋。

ふらふらとしながら帰っていくお千佳を満足に見送ることもできず、二人は茫然と座り込んでいた。

お千佳は弥一のすさまじい『笑顔』を前に、何をしに小野屋へ赴いたのかをスッカリ忘れることにしたのだった。

これがお千佳の抱いていた想いだったのか？　こんなにあっさりと終わってしまうものだったのか！？

ぐるぐるぐる、と駆け巡る疑問。

お滝は頭を抱えなくなってしまった。いや、実際に抱えてしまった。

それは弥一も同じだったようだ。

何度か逡巡したあと、弥一はようやく切り出した。

「お嬢さん、おれの顔、怖くて気持ち悪いでしょう」

「え」

ぎくり、とした。こんなにも率直に、自分から言ってくるとは思ったこともなかったからだ。というより、自覚していたことに衝撃を受けた。

「まあ、まさか走って逃げられるほどとは思っていなかったのですが」

いつもは逆の反応をされる弥一にはやはり酷な事件だったか。

だが、それは別にいいんです、と弥一は言う。

「どうしてもだめなんです」

「はあ、と大きなため息をつき、大きな手で己の顔を覆ってしまう。指は長いが節が目立つ、働き者の手だ、とお滝は頭の片隅で思った。

「お嬢さんの前だと、お客人に向けるような顔がつかれないんです」

「あ……。弥一、なんでだかはわからないけど、もう十年たっても治らないんだから仕方ないよ」

「いえ、そうじゃないんです！」

「気にするな、と続けようとしたお滝だが、言い終える前に弥一にさえぎられた。

「おれは、お嬢さんの前だと顔がこわばってしまふんです！ 戻そうとすると余計にひきつって……祖父にも『どうにかしろ』言われましたが、治らないし、正直気づいたのは五年も前だけど今はそんなの自分でもわかってるし、あ、いや、それはどうでもいいんですけど……。その、あの、なぜか、ということ……」

「と、いうと？」

「こんなに脈絡なく話す弥一は初めてだ。お滝はとりあえず自分の悩みはおいて、大切な守役の話をうながす。どういうわけか、弥一は土の中までもぐりこみそうなほどに身を縮めていた。

そして大きく息を吸うと、弥一は真っ赤になった顔をがばりとあげた。

「あ、あんまりお嬢さんが綺麗だから！」

「弥一を見て、お滝は首をひねって三つ心の中で数えた。すると、胸の中が急にかあっと熱くなり、頭が熱に負けてぼんやりしてくるのを感じた。

「ええー？　なんでー？　どうしてー？」

「どういうわけだか、口から勝手に飛び出てきた。自分でも意味がわからない、ひたすら疑問をなげかける言葉ばかりだ。

「自惚れではなく、綺麗だ、とは言われ慣れていた。それなのに、

どうして弥一から聞いた言葉で、自分はこんなになっちゃってしまうのか。今までそんなこと言わなかったくせに、急に何を言い出すのか。

「いや、なんてと言われましても……」

「だって、今までそんなそぶり見せたことなかったじゃない」

「……そうでしたか？ それでもおれは、初めてお会いしたときからずうつと想ってきました」

だからずうつと、顔がこわばっていたのだ。

お滝は、弥一の『想ってきた』、という言葉に胸をうたれた。

ぐるぐるぐる、の悩みの答えの一つが目の前にあるような気がした。だが心は落ち着かない。

心なしに肩を落とす弥一を見ようとせず、お滝はわたたと腕を振り回す。

「うわぁー、こういうのってあるのねえ。驚いたー」

「……そういう反応もあるんだなあって、おれも驚いています」

はは、と軽く苦笑する弥一。

「お嬢さんも最初は怖がってらしたみたいですけど、いい加減慣れたようだったので、いつそこのまま通そうとしていました。でも、さきほどのお千佳さんのおびえようを見て、白状しようと決心したんです」

なんだか、スッキリした。

弥一は小さくつぶやく。

肩の力が抜け、目元が優しくゆるんだ。口角が少しだけあがり、

おだやかな弧を描く。

今まで見たことのない、弥一の笑顔だった。

「あ」

「お嬢さん？」

声をあげたお滝に、弥一は首をかしげるが、顔は穏やかなままだ。初秋のさわやかさでも地獄の悪鬼でもない、弥一の笑顔。

しばし無言で、弥一を困らせるほどに、お滝は弥一の笑顔に見惚れた。

第五話（後書き）

感想などいただけたらとても嬉しいです。
よろしく願います！

次回で最後です。

最終話

後々会ったお千佳は、やけにさっぱりとした顔でお滝に言った。

「なんだか全部ふっきれたの。急に体が軽くなったみたいだわ」

まだ十五、恋をしたりないわ、と例の縁談話ともしばし距離をおくそうだ。

弥一はそれを聞いて、小さく笑う。

「きつとお千佳さんはもともとそのつもりだったんですよ。縁談が嫌で、それを避ける理由がほしかったんでしょう」

舞い込んできた縁談を前にとまどったお千佳は、身近なちやうどいい男を相手にして自分をだまそうとしていたのだ。だが、弥一の尋常ではない凶相は計算外だった。恋い焦がれた相手を見て恐怖のあまり逃げだした、では話の通りがつかない。だから、開き直って正直になり、すっきりしたのだらう。弥一はお滝にそう語った。

「でも、それで振り回されちゃ弥一がかわいそう」

「それもわかっていたんじゃないでしょうかねえ。おれがお千佳さんに惹かれるわけがないって」

お滝は弥一から目をそらし、手元の小さな包みを広げた。気恥ずかしかったからでもあるが、弥一の言うことが全ての真実とは思えなかったからだ。お千佳の赤い頬が頭をよぎる。だが、それを口に出す必要はない。

包みから出てきたのは、いつか見た、小さな小さなお饅頭。

「あら、かわいい！」

小さいだけではない。今日のお饅頭は、それぞれが違う色をうつすらとつけているのだ。薄い赤、茶色、白、薄黄、緑の五色。

「今日からの新作です」

喜ぶお滝を弥一はまぶしそうに見つめる。その顔からは、以前より少しばかり、ほんの少しばかりしわが減っていた。

お滝は大店の娘、弥一はその守役。

その関係はもうしばらく続くことになるだろう。

それでも弥一はずっとお滝の側にいて、話をして。

お滝だけに、特別な笑顔を向け続ける。

——とりあえず、小野屋騒

動これにて了。

最終話（後書き）

完結です。

長々とお付き合いいただき、ありがとうございました！

感想などいただけたらとても嬉しいです。

それを励みに次回作もがんばっていききたいと思いますので、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4873k/>

小野屋騒動顛末記

2011年9月18日03時15分発行